

羽柴先生との出会いと

その思い出

高 司 良 恵

(会員 佐伯市宇山)

文箱の中に一通の色あせた手紙が、大切に保管されている。

私が辺地校勤務として、鶴見町有明小学校（現在廃校・松浦小学校に合併）に、昭和四十二年に勤務していたある日のことが、きっかけとなって史談会羽柴先生の御指導をいただく御縁となった。

その頃、鶴見町のバス路線は「日ノ浦」までが終点で折返しをしていた。その外は定期船の「有明丸」や「おろし」が、佐伯までの交通の便だった。

当時の学校勤務は、男の先生は宿直、女の先生は日直の役目があり、日曜日でも当番になれば平常通り勤務していた。

丁度、私が日直をしていた日の夕方、そろそろ帰り支度を始めていたら、玄関の方で声がしたので出てみる

と、羽柴先生と三・四人の男の方が立っていた。一見して随分お疲れの様子だった。

羽柴先生とは現職の頃、切畑小・中学校で一緒になり色々とお世話になった。久々にお会いし、なつかしさと親しみがこみ上げてきた。ちよつと休ませてほしいとのことで、早速校長室に案内。粗茶を差し上げたら、「おいしい！おいしい！」とくりかえしながら、とても喜んで召上がってくれた。

今日は「丹賀」まで切支丹について、現地調査に行かれその帰りだと話された。

当時の交通事情から察して探訪コースは、朝「葛港」から船便で「丹賀」に行き帰りは、尾根伝いで「羽出」にある中浦小・中学校まで歩き、そこから海岸沿いの小さい道を通って中浦トンネルを越え「鮪浦」「帆波」を経由して「日ノ浦有明小学校」まで歩いたのではないかと想像される。残念な事に十分なお話も聞けなかった当時の私の無関心さが今、悔やまれて仕方がない。

だが、当時としては随分不便な地まで出かけたものだと、その行動力と探究心には、ただただ驚くばかりで敬服して止まない。羽柴先生と同行された三・四人の方は、御年配でお名前を聞くことができなかつた。

学校を出られ「日ノ浦」のバス停まで行かれるその後

忘れられない探訪記から

姿を窓越しに見送りながら、おひとり、おひとりのお姿が、なにかしら印象深く、今でも私の脳裏に深くやきついて忘れられない。

数日後、早速の礼状を受け取った。達筆な筆跡、心あたたまるおやさしい手紙に添えて、「佐伯史談」が同封されていた。

先ずガリ版刷りには驚いた。原紙（油性）と鉄筆・ヤスリ版・印刷機・ローラー・インク：とよくもこんな冊子が手作りで出来るものだとその神技には、ため息が出た。

又、手紙には、現在三・四人の女性の方も入会しており活動されている事がしたためであり、入会のおさそいでもあった。

辺地有明小学校の日直、丹賀探訪の帰りに立ち寄って下さった御縁、心温まる礼状、これが私の史談会に入るきっかけとなり現在に至っている。

羽柴先生は、探究心にもえ、常に行動を通して郷土を愛しておられた。まず歩く、自転車・バス・船：と当時は自家用車などは夢の中の又、夢であった。道路事情も未開発で、随分悪条件の中を楽しみながら、同志の方々と手弁当で驚く程、各地を踏破している。

本匠村風戸山に「地獄谷」がある。日曜日、羽柴先生と数人で自転車が出向いた。「地獄谷」の实地探訪である。地名から想像していた以上に、自然の織りなす断崖の造形に身のすくむ思いがした。両崖迫る深い谷間を歩いた。葛がぶら下がり草木が繁りうす暗く不気味であった。岩石について詳しく話して下さった事が思い出される。ふと上を見上げると谷と谷の間から、まっ青な空が垣間見えた。

探訪を終わった一行にほっとした安らぎがあった。

「大分県百景ふるさとを詠う」

大分合同新聞社編に

誰が云いし地獄の谷や春一歩 良恵

特選句となり私にとつて最高の幸せであった。

以後羽柴先生から、折々の書状と毎年、年賀状をいただき深い感銘を覚えた。

◆ 一年間あるいは将来を展望した史談会の在り方とその心意気

◆ 点在する文化財に対する愛着と探究、行動力、学術的研究と記録

◆ 佐伯を基点として九州・四国・中国路に広げる探訪の輪

◆ふるさとを愛し、緻密な計画と小気味いい程のス
ケッチが心豊かに、わかりやすく年賀状に書き添え
られていた。

又、羽柴先生は大分合同新聞の夕刊「灯」に執筆され
充実した生活、豊富な知識と体験を魅力的な文章表現で

紹介されている。
佐伯史談会四十周年記念誌一九八号発行にあたり所蔵
の中から年賀状及び「灯」を紙面の関係で一部紹介し
ます。



初冬—この言葉は、晩秋ほどの感興は
わかないが、季節としては私は好きであ
る。

農家では田畑の仕事はひとまず終わ
り、庭先にはもみすりの落ちこぼれはも
うあるまいに、チャボが植木の下など仲
よくほせてくっている。背戸の疎林にはも
う冬の沈静がやって来て、冬枯れの線相
である。

へこにぼわる道草は枯れ、林の中は透
けて明るくなっている。空もよく澄ん
で、そよ吹く風はわずかにほだ寒く、冬
の気配は十分である。杉林をバックにし
た高い柿(かき)が何本も、その枝先に
まっかな熟柿(じゅくし)を残してい
る。山村でも食生活が変わって、見捨て

られたままである。

先ごろの新聞にはよく写真入りで、ジ
ャンボ山芋を掘った記事のをせていた。
それはきまって四、五十歳の方によつて
である。今どきの若い方や子供たちは、
忙しいのか、とんじゃくがないのか、あ
るいは山芋掘りの楽しさを知らないの

山芋掘り

羽柴 弘

か、時代は変わっている。

朝の散歩で橋を通ると、カイツブリが
仲よく泳いでいる。石を投げても屈かな
い距離である。その風情がいい。すぐ句
にならないかと試みたが、にわかに佳吟
にまどまりそうもない。結局、この自然
のたたずまいを、いとおしく思いながら
歩いた。

さて、人間は昔から、川や海に出かけ
て魚介をあさり、野や山に鳥けたものを
追い、また四季折々の木の実、草の実を
求めていた。さきにあげた山芋掘りもそ
の二つである。

そんな祖先たちの血は、数十世代次々
に受け継がれ、今の私たちの中から流
れている。だから毎週土曜の午後から、
遅くまで車で出かけて海釣りに熱中し
たり、今解禁中のイノシシとりで夢中にな
っている。そんな男たちのあることはむ
しろ当然である。

毎晩のように、その仲間の狩猟話が茶
の間をにぎわし、子供や女たちまで夜の
更けるのも忘れるなど、これまた当然の
ことである。

私もはこのような野性を、いつまで
も失ってはならないと願うが、いかにな
ものであろうか。

(佐伯史談会副会長)



最近万々の町村で、ふるさと祭りが盛んに行われ、都市と農村を問わず、漁村でも山村でも、それぞれ土地に密着した伝統芸能が披露されている。

これは先年来の、県の「ふるさと振興事業」としての指導・助成のおかげであるが、平松県政になって、一町村一品運動も加わり、その土地の特定産業を奨励し、これも助成の対象になっている。

そこで各町村ではこれにこたえて、地方文化や特殊産業の担当者が、躍起となってふるさと振興と取り組んでいるようである。

ところでこれらの事業は、なにもその町村に昔から受け継がれている、伝統産業や民俗芸能にのみこだわる必要はない

と思う。適切な例とは言えないが、もう十年以上も前のことだが、土佐のヨサコイ節から、歌手のペギー葉山が、新たに「南国土佐を後にして」をうたい、たちまち本来のヨサコイ節にとって代わり、新民謡として全国にうたわれた。

とらさと のあひ



羽柴 弘

また私の母村本匠では、恵まれた杉の造林地の間作に、薬草「オーレン」の増殖をすすめている。両方とも立地事情を生かしてのことであるが、その発想はきわめて新鮮である。

そこで私は言いたい。これらふるさと

振興ないし一村一品運動などは、その土地の条件や歴史や伝統は、一応も二応も尊重すべきであるが、社会経済情勢の推移を見きわめつつ、新しい事業を開発・創始したり、その土地の人情や風俗にマッチした産業や芸能を、他地区から移入育成する、飛躍があってもよいのではないか。

ここ当分は山村にいかん原木が豊富でも、炭焼きの全面的振興は望まず、コンニャクの栽培のような特産物は立地条件がいにしても、大々的に奨励出来る時節ではない。また民俗芸能にしても、例えば緒方神楽のようなのを、小部落に移入伝習するなど無理である。やはりやるからには町村が後ろたてになり、定着するまで育成をつづけなくてはなるまい。

要は村を挙げてのふるさと愛護の精神が望まれる次第である。

(佐伯史談会副会長)

灯



桜の花便りがはじまるころになると、私の心はふるふるの山やとてにひかれる。そこには毎年、山ウドが大書に出るからである。

東京にお住まいの塚(い)友片岡氏には「山菜記」の好著が三冊もあり、それには季節を追うて山菜何十種かが、新鮮な描写で書かれてあり、私はその愛読を毎年くり返している。

その中で片岡氏は、タラの芽を山菜の王者に推し、ウドをその影武者だとなきっているが、私は山ウドを山菜の筆頭に選びたい。

ご存じの通りタラは、とげとげの木のことです。高くに、ちよびりと芽がつく。そして、ちよびりととらぬと手にとげがさ

さり、文字通り痛い目にある。またタラの木はそうならなくな、山じゅう歩いてもとれる量は知れている、味はウドによく似ているが、香気や風味がちょっと落ちる。

それに比べるとウドはちがう。とくに山ウドは秀逸。里ものやハウス園菜の軟白ものと同視されてはかなわない。短

山ウド万歳

羽柴 弘

いがすぶとへ、白くたくましい莖、中にはほんのり赤紫に薄化粧までして、ちよこまった緑の葉がびっしりつき、全体がしっかりとして、土土のおいがブンとくみぢらたまりな。

四、五日前、私は待ちきれない思いで一人で山に出かけた。誘っていた友人にきしつかえが出来たからである。かなり

遠い山道だが、胸はわくわく、ただ足にまかせて登った。

今年は桜が遅かったのと通じるのか、また芽ウドであった。古株の根もとにまず見つけ、掘りどたら長さ四、五寸ほど、色白のすばらしいのが六本ほど！。これを手始めに夢中にとって歩いた。新しい株も見つけた。南向きのゆるい斜面では、三、四十センチ伸びたのも十数本とれた。掃りには両手に提げたビニールの大袋が、ずっしりと重かったので、例年に負けない大獲であった。

それを親族や知友にくばることも楽しいことだが、最高はなんとい。でも、いふるあびて食卓につき、しょうちゅうで、山ウドの酢みそを薬じんだことであつた。

もう一度、二番生えの、次の新芽が伸びるのを待って出かけた。また十日ほど先のことである。(佐伯史談会副会長)



高齢化社会がしきりにいわれ、老人福祉のことが社会の重大な課題となっていて。テレビに、新聞に出ない日はない。とくに敬老の日の前後は集中的に扱われていて、老人の側からも大いに考えさせられている。

私も今日で満七十六歳、先日はある団体から、数え年での高寿のお祝いをいただいた。しみじみありがたいと思った。明治三十七年生まれ、四分の三世紀、明治―大正―昭和―三代にわたっているの、明治生まれであることをひそかにほこりに思っている。

しかし、若い頃の私は健康きわめて不安定で、微熱になやまされて夜は盗汗、

朝は鼻血といった状態で、しかも親戚に結核でたおれるものがつづいていた。三十まで生きられるかどうか、心中きわめて不安であった。

ところがよくしたもので、結婚して家庭を持ち、大勢の子女をかかえるに従って、元氣いっぱい働けるようになり、田

老病二苦の中で

羽柴 弘

畑を耕しつづけて植林にも励み、いつのまにか健康の不安は忘れてしまっていた。その上同志と郷土の史跡をめぐったり山野を歩きまわって、かなり得意になっていた。自分が歳をとったという、肉体的な衰えをほとんど感じていなかった。そこに三カ月前の、過労がたたっての発病となり、入院治療という打撃となっ

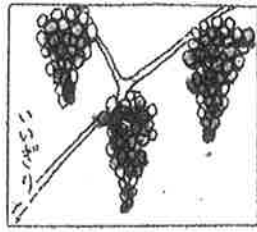
た。それは病気だけの問題でなく歳のせいで、無理の積み重ねが老体にひびいてきたのであった。

したい仕事は山のようにある。何となくとも年度中に果たしたい「本匠村史」の編さん、今は遅々として進んでいない。しかし、統計上私にはまだ八年ほどの平均余命がある。うまぐやればまだかなりの仕事が出る。

自宅療養もわがて二カ月になる。しかしまだこれからである。みんなのすすめを十二分に受け入れ、安静第一、養生に努めなくてはならない。仕事は二の次である。

日に日に涼しさを増し、からだの調子もよろしい。散歩をはじめたり、おいおいは軽い作業をとり入れたりしながら、日々を大事に生きていくこととした。

(佐伯史談会副会長)



歳末から新年へ

—私の感動と、そして抱負—

羽柴 弘

三の丸櫓門は、工事も順調にすすみ、瓦をふきおわりました。土の乾燥をまって、しっくい^{しっくい}をいたしますので、竣工は春めいてからでしょう。文化財ですから、工事は念入りにすすめています。

私は毎週二回、青山から峠を越して蒲江に通い、町史編さんの仕事に当たっています。蒲江の風土と、そこにそだった人々の営みや、すばらしい自然景觀に、心を奪われています。

ある日、峠を越すバスの窓から、まっかにかがやくいぎりの実をはじめて見て、その美しさに心を奪われました。枝一ぱいに朱色の房をぶら下げ、それが日にはえて、それはそれは見事です。

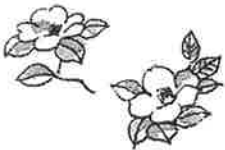
いぎりの朱^{あか}の実の房つややかに

九月に古稀（七十才）を迎えた私ですが、幸い足腰は丈夫ですから、今のうちに皆さんと一しょに山に登ったり谷を歩いたり、史跡や民俗資料を訪ね、「ふる里佐伯」のよいものを開発しましょう。

「佐伯史談」も四月には百号に達します。寄稿も多く、鉄筆をにぎって原紙をきり、編集や印刷をすることを楽しんでいます。

新年はどうぞよろしく。

（除夜の鐘をききつつ）



まず、新年お目出とうございます。元日の朝十時、ど
さり・と届いた年賀状の束を横においたまま、ごあいさつ
を急いで、今机に向かっています。

かなり精力的に、急ぐものから先に、仕事は片付けて
きたのですが、「謄写史談」の最終号の発行、平凡社の
「歴史地名大系」の原稿、「本匠村史」の原稿と、かな
りこなしたのですが、これに身边の雑事が加わって、そ
の滞りが年頭に來てしまいました。やっと年賀状書きと
いう、まことに怠慢、まことに非効率なていたらく、面
目ない次第です。どうかお許し下さい。

過ぎ去った一か年、精一ばいに楽しく、いろいろな仕
事に当り、みのり多い一年であったことに満足をおぼえ
ていますもの、心ないささかな悔恨のこり、そのつ
ぐないを今年はしなければと、そんなこともあります。
でもそれは弱い人間ですから止むないことと、それは今
年のはたらきの中で処理しようと考えています。どうか
ご寛恕下さい。

明治三十七年生まれの方は、昔流に数えますと数えの
七十七歳、今さら別に何が出来ましょう。ただもう今与

えられている仕事を、りつぱにまとめあげることが第一
と観念しています。しかし統計的には、まだあと八年以
上の余命があることになっております。もしその通りに
いくとしますと、まだまだ何か考えなくてはなりません。

余技のような謄写印刷も、まだ棄てられません。何か
お役に立てたいものです。「史談会」の方も出来る奉仕
には励みます。時折りはどうかご声援下さい。
今年もどうかよろしく

たどり来し

くぬぎ林のやぶ柑子



佐伯史談

元旦

学校図書館の仕事の

余暇、私は前年に続

いて郷土史の研究を

手がけます。

城山、城下町、一歩出れば

毛利藩政の跡が残って

います。これらは

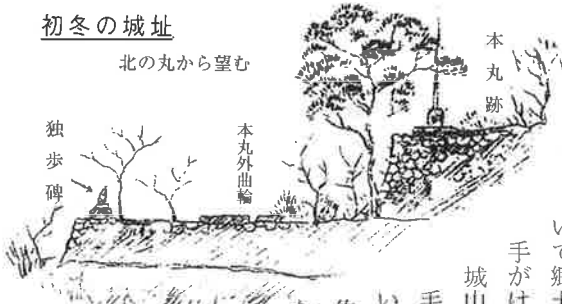
佐伯市のもつ

たからです。

本丸外曲輪

北の丸から望む

初冬の城址



の石垣が残っています。

築城のまま

殆んど慶長年間

の城跡です。

上図は夕方

数です。

彫しい石の

佐伯史談

第十八号—第十九号

佐伯史談会

「史談会」の機関誌は毎月発行をつづけますが、今年
は紙上更に新風を吹きこませたいものです。

又、家業農耕と共に父祖の山林「カンネオ」(本匠

村宇津々)の山に造林を新に

致します。杉や桧二五〇〇

本位、春の植えこみと夏の

下刈りをたのしみにしてい

ます。

造林地、谷がすばらしいです。

真下八米余
桃河内の麓



羽柴 弘

新しい年をどう迎えようか、今年はどうなことを心がけようか。私はいま、しきりに思いめぐらしています。

しかし、旧年中がそうでありましたように、新年も引きつづいて、皆さんのお世話になることでありましょう。どうかこの上ともよろしくお願い申します。

私も、もういい老人になりました。背がまがり、眼はおとろえ、いたずらに老醜をさらすことを恥じています。しかし、せめて働ける間は何かと好きなことを手がけながら、少しでも皆さんや、社会のお役にしたいと思いつづけています。

ふるさとの道のほとりの石碑いしづゑに、そのころの村里の歴史をしのび、昔の人々の生活くらしをいとおしみたいものです。今は人通りも全くとだえている古い峠路とよかけに、人々の織りなした哀歓を、しみじみと味わいたいと思っています。

あなた様、ご一家皆様のお仕合せをお祈り申します。

敬具



謹賀新年

昭和五十三年 元旦

皆様のご協力のお蔭で、史談会は堅実な歩みをつづけ、この三月十六日は発足満二十周年の記念日です。ありがとうございます。

よくもここまで成長したものです。「佐伯史談」が示している研修の積み重ね、みんなから驚嘆されています。しかし、ここで天拘になつてはいけません。次の三十周年に向つてふみ出すべきで、もろもろの研修活動や事業運営、ここらで画期的な変革を考えてよいのではないのでしょうか。

組織・陣容の建直しも考えられます。「佐伯史談」の活字印刷化もよいでしょう。会に清新の気をもたらすために、若い会員を求め、地域社会との交流を盛んにすべきでしょうか。

任せきりの史談会でなく、多数会員の希望と力を結集した、ピチピチした史談会にしたいものです。ご賛同願います。



頌春

昭和四十六年歳旦

椿山に寄せて

羽柴弘



今から凡そ四百数十年前（室町時代）、佐伯氏の拠った古城の址拇牟礼は、晴れた日には黒々と市の西方にそびえているが、その向こうに一きわ高くうす紫にかすむ椿山の連峯を見ることが出来る。

その主峯は海拔六五八・八米、市の近郊では高い山であるが、それが宛も屏風を立てたように、或は拇牟礼を抱くかのよう、その山頂の稜線を長くのばしてそびえている。まことに特異な、そして親しみ深い山である。

年頭の三日、私は史談会の同志とこの山に登り、その山頂から心ゆくまで南豊の山野や、番匠の清流を展望し、まず佐伯の自然と歴史、人々のいとなみやこれからの変転を想うて見たい。

椿山はその山腹に風戸山二つの部落をかゝえ、往古は聚落が発達し交通も盛んであったと伝えられ、今も所々にその跡をとどめているという。そして下ればしな谷の溪谷、地獄谷の景勝や鍾乳洞の怪奇があるが、樹林は葉がおちつくして明かるく、谷水もやせて歩くに却って快適であろう。

この椿山がうす紫から少し蒼味を帯びてくると早春である。しかしそれはまだ数旬の後のことである。

（次頁下段に続く）

父と史談会の思い出

塩月 敦子

故塩月佐一會長二女

(佐伯市匠南区)

佐伯史談会が発足して四十周年を迎えるとのこと、おめでとうございます。先日、高司先生がお見えになり、記念誌を発行することになりましたので、父の思い出の一文を寄せていただけませんかとの依頼を受けました。思ってもいなかった突然の要請に困り果ててしまいました。史談会での父の活動状況は、ほとんど知らなかったからです。何を書けばいいのか文案もまとまらず、三輪先生を、お訪ねして助言をいただきました。

父が史談会と、かわりを持つようになった経緯は一九七五年学校を定年退職後、佐伯教育事務所で社会教育指導員として、文化財行政の仕事に携わるようになったとき、羽柴先生との出会いがきっかけだったのではないかと思います。三年後に事務所を退いた後、史談会の仕事に喜びと生き甲斐を見出し充実した日々を過ごしてい

おわりに

本年度は、佐伯史談会発足四十周年という節目の年を迎えた。かねてよりの念願だった「佐伯史談」の復刻版も立派に上梓された。復刻された史談は貴重な見事な研究資料として凄い程のエネルギーが、内容豊富に満ち溢れ圧倒される思いがする。今後我々の研修の指針として大いに役立つことを確信している。

ふるさとを愛し史談会を愛し育てて下さった諸先輩の方々の業績に敬服・感謝すると共に二十一世紀に向かってその伝統の重さを、ひしひしと感じている。

来るべき五十周年にむかって新なるスタートをしたいものだと思念じて止まない。